

# 胆 嚢 良 性 腫 瘍

— 自験2例と本邦報告例について —

川崎医科大学 消化器外科

木元 正利, 中井 正信, 瀬尾 泰雄  
 清水 裕英, 長野 秀樹, 今井 博之  
 佐々木義仁, 岩本 末治, 郡家 信晴  
 山本 康久, 佐野 開三

(昭和58年2月4日受付)

## Benign Tumors of the Gall-bladder

— Two Cases and Review of Japanese Literature —

Masatoshi Kimoto, Masanobu Nakai  
 Yasuo Seo, Hirohide Shimizu  
 Hideki Nagano, Hiroyuki Imai  
 Yoshihito Sasaki, Sueharu Iwamoto  
 Nobuharu Gunge, Yasuhisa Yamamoto  
 and Kaiso Sano

Division of Gastroenterological Surgery, Department  
 of Surgery, Kawasaki Medical School

(Accepted on Feb. 4, 1983)

胆嚢の良性腫瘍の2例を報告した。

2例とも乳頭状腺腫であったが、うち1つに悪性変化を認めた。

本邦報告例を集計し、文献的考察を加えた。

本症は30～60歳の女性に多く、前癌状態と考えられ、胆嚢摘出術が良い適応と考えられる。

Two cases of the benign neoplasms of the gall-bladder were reported. Both were papillary adenoma, and one of them had papillary adenocarcinoma in situ.

Collecting the cases of the benign tumors of the gall-bladder reported in Japan, discussion was made.

Benign neoplasms of the gall-bladder is seen commonly in female in the fourth to sixth decade, and the indication of cholecystectomy in such case, should be very probable because these are considered to be precancerous conditions.

### はじめに

胆嚢の原発性腫瘍は比較的まれであり、そのうちほとんどが癌腫で占められている。した

がって、胆嚢に発生する良性腫瘍はきわめて少なく、そのうえ偶然の機会に発見されることが多かったが、最近では種々の新しい検査法の発達により、術前に診断される症例も増加してき

ている。

今回、われわれは胆嚢良性腫瘍の2例を経験し、そのうち1例は悪性変化を伴っていた。この2例の報告とともに胆嚢の良性腫瘍について文献的考察を加え報告する。

## 症 例

症例1 54歳，女性

主 訴：心窩部痛

家族歴，既往歴：特記すべきことはない。

現病歴：昭和49年頃よりときどき悪心，嘔吐を伴う心窩部痛があり，近医で胆道系疾患の疑いの下に経口法による胆嚢造影を受け，胆嚢陰影が描出されないことを指摘されたが放置していた。

昭和54年8月，心窩部痛があり，点滴静注胆道造影を受けたが以前と同様に胆嚢は描出されず，この時は胆石症と診断されている。昭和55年6月にも同様の症状があり，手術をすすめられて当科へ紹介入院した。

入院時現症：体格 軽度 肥満型，栄養状態良好，結膜に貧血，黄疸を認めない。心肺に異常所見なく，腹部は平坦で軟，右季肋部に軽度

の圧痛を認める以外に特記すべき所見はない。

血液化学検査：入院時 Bilirubin 1.1mg/dl, GPT 34 IU/l, 血清 Amylase 475 と軽度の上昇がみられたが，入院後2週間で全て正常域に復した。白血球数は正常で分画にも異常はなかった。

## レ線検査その他

腹部単純写真では正常，点滴静注胆道造影で胆嚢は描出されないが，総胆管に拡張や結石等の異常陰影を認めない。

胆道系エコー所見では胆嚢の腫大はなく，胆嚢の肝床面から頸部にかけて debris と思われる細かいエコーと，それに混じて acoustic shadow を伴う小さな strong echo を多数認めた。

以上より胆嚢結石症の診断で開腹した。

手術所見：胆道系を除く腹腔内臓器に異常はなかった。胆嚢壁は軽度に肥厚し，漏斗部から体部にかけて示指頭大の軟らかい腫瘤を触知した。同時に小結石を多数触知した。胆嚢摘出後直ちに胆嚢を開き，粘膜面に樹枝状のポリプ様病変を認めた。悪性化を考慮して，所属リンパ節の廓清と胆嚢の肝床の電気焼灼を行って手術を終了した。

摘出標本所見：胆嚢壁は軽度に肥厚しているが，粘膜面は比較的正常に近く保たれており，ポリプ様病変は体部のもの  $2.5 \times 2.0 \times 1.6$  cm, 漏斗部のものは  $1.8 \times 0.8 \times 1.0$  cm と，いずれ

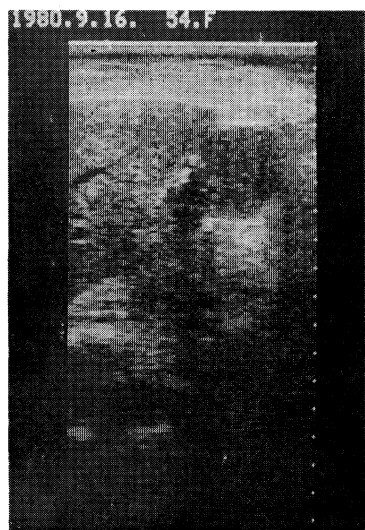


Fig. 1. Shows the ultrasonogram of the gall bladder of case 1, and revealed the debris-like shadow and the strong echo with acoustic shadow in the liver bed side of the gall-bladder.

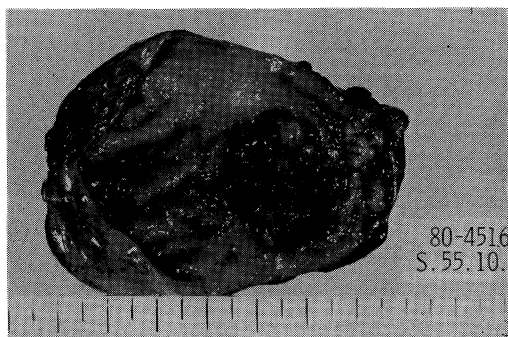


Fig. 2. Shows the resected specimen of case 1. Papillary tumors are seen in the infundibulum and body of the gall bladder.

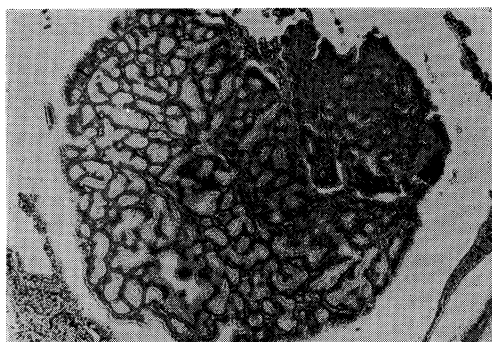


Fig. 3. Shows the microscopic findings of the biggest tumor of case 1, carcinoma in situ is found in papillary adenoma.

も山田IV型の樹枝状ポリープで、同時にコ系石と混合石合計 69 個の結石を合併していた。

組織学的には両者ともに papillary adenoma の像で、体部病変の一部に adenocarcinoma in situ の像が認められた。

術後の経過は良好で、術後1年の現在再発の徴候なく健在である。

#### 症例2 57歳, 女性

主 訴: 心窩部不快感

家族歴: 特記すべきことなし。

既往歴: 昭和37年虫垂切除, 昭和52年結節性甲状腺腫で摘出術を受けている。

現病歴: 昭和54年秋頃より心窩部不快感あり, 近医を受診し上部消化管造影を受け, 右季肋部の陽性結石像を指摘されている。

昭和56年8月再び同様の心窩部不快感あり, 手術をすすめられ当科へ紹介入院した。

入院時現症: 体格中等, 栄養状態良好, 結膜に貧血, 黄疸を認めない。心・肺に異常所見なく腹部は平坦で軟, 虫垂切除術の瘢痕を認める以外に特記すべき所見はない。

血液化学的検査: すべて正常。

#### レ線所見およびその他

上部消化管造影で右季肋部に径5mmの陽性結石像と, 胆嚢によると思われる十二指腸の圧排像を認める。

点滴静注胆道造影では胆嚢は造影されず, 胆管には異常所見を認めない。

手術所見: 開腹すると胆嚢壁は軽度に肥厚し, 内部に結石を1個触知したため, 胆摘術を施行した。

摘出標本所見: 胆嚢の粘膜はちりめん状で, cholesterosis の所見があり, 体部中央に  $0.8 \times 0.7 \times 0.4$  cm,  $0.5 \times 0.3 \times 0.2$  cm の2個の有茎性ポリープを認めた。また胆嚢管にも  $0.2 \times 0.2 \times 0.1$  cm の有茎性ポリープがあり, 胆嚢内には  $0.7 \times 0.7$  cm のコ系石が1個存在した。組織学的には3病変ともに小腺腫であった。悪性

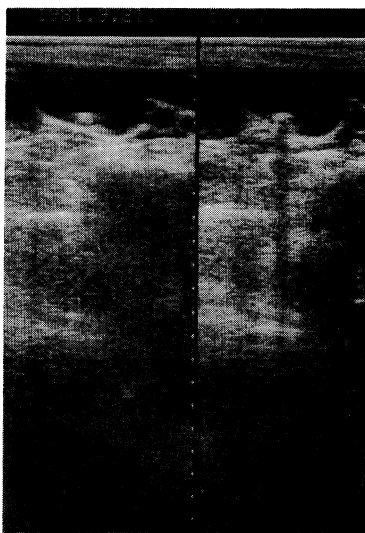


Fig. 4. Shows the ultrasonogram of the gall bladder of case 2, which revealed the mass lesion without acoustic shadow beside the strong echo with acoustic shadow.

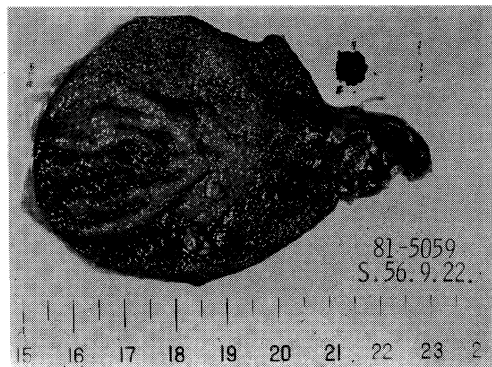


Fig. 5. Shows three tumors in the body and infundibulum of the gall bladder in case 2.

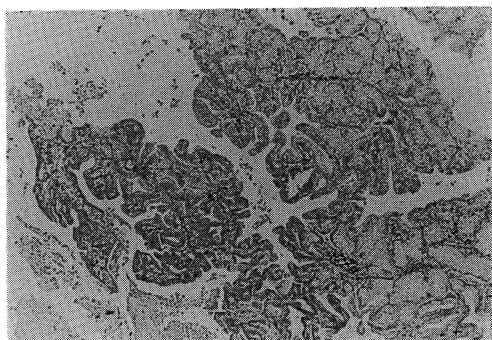


Fig. 6. All lesions of case 2 are the papillary adenoma.

像は認められなかった。

胆嚢エコー所見での acoustic shadow を伴う strong エコーを胆石症と診断したが、術後の詳細な検討では、体部に胆嚢壁と連続する2個の小隆起性病変を認め(↑印)、この像は摘出標本と一致するものと考えられた。

考 案

胆嚢の原発性腫瘍は、遭遇する機会の少ない疾患であり、そのほとんどが癌腫で、良性腫瘍はきわめてまれである。胆嚢の良性腫瘍について最初に病理学的記載を行ったのは、shepard<sup>27)</sup>の論文でみると Heschel (1852) と言われている。本邦では、副島が1925年に報告したのが最初と思われる。

発生頻度

胆石症手術例に対する割合についてみると、本邦では神<sup>12)</sup> 0.3%、小島<sup>29)</sup> 2.4%、鍛塚<sup>30)</sup> 2.3%、岡島<sup>13)</sup> 3.9%と報告している。われわれの教室では胆石症手術例289例中2例で0.8%であった。外国では Mayo<sup>31)</sup> 4.2%、Kirklin<sup>32)</sup> 8.5%、Swinton<sup>33)</sup> 0.15%、Kane<sup>34)</sup> 0.4%で報告者によって頻度にかかなりのばらつきがみられる。これは良性腫瘍に関する諸家の見解に混乱が認められるため、最近の報告を総合すると、1%以下の頻度になるものと思われる。

年齢および性別差

年齢と性別に関して Shepard<sup>27)</sup> は、平均年齢は50.2歳であり男女間に差はないとしてい

るが、Boergerson<sup>35)</sup> は80%が女性であるとし、Edmondson<sup>36)</sup> は60歳前の女性に多いとしている。本邦では鈴木が40歳以上の女性に多いと述べ、荒木<sup>37)</sup> は1973年までの本邦報告例の集計から、50歳台に最も多く、女58%、男42%で女性にやや多いとしている。

Benign Tumors of the Gall-bladder in Japan

年 齢	性 別			腺 腫	その 他	ポリープ	胆石		悪性化 (有石例)**
	男	女	不明				有	無	
～19									
20～29	7	8		10(6)*		1	2	13	1(1)
30～39	2	13		8(3)		6	6	7	2(2)
40～49	8	14		12(10)	1	2	12	9	4(3)
50～59	11	20	1	18(9)	4	5	15	12	7(4)
60～69	11	9	1	8(5)	2	5	10	10	7(4)
70～	4			3		1	1	3	
不 明			1	23	15(3)		4	6	4
計	43	65	25	74(36)	7	24	52	58	22(14)

\* ( ) 内は papilloma

\*\* 悪性化例は腺腫とポリープ例の22%

今回、われわれは荒木の集計以後1973年12月から1980年12月まで34例を集計し得たが、この期間でも女性の報告例が多く66%であった。

1980年12月までの本邦報告例からみて、一般的には30～60歳の女性にやや多く、胆石症に比べて若干高齢者にみられるものであらう。

病理学的分類

胆嚢の良性腫瘍の分類は、初期にはShepard等の分類が用いられているが、仮性腫瘍を腫瘍性病変として、真性、仮性の組織学的解明がなされないままに集計されている。初期の報告例に混乱がみられるのはこのためである。

最近ではEdmondson(1967)やChristensen<sup>38)</sup>(1970)の分類が用いられており、真性腫瘍はかなり低い頻度であるという報告になってきている。

本邦例を組織学的に分類すると、平滑筋腫、<sup>8)</sup> 顆粒芽細胞腫、<sup>5)</sup> 脂肪腫、<sup>22)</sup> カルチノイド<sup>20)24)</sup>

などきわめてめずらしい症例もあるが、そのほとんどは腺腫であり papillary type (乳嘴腫, papilloma) が多い。

われわれの2例とも papillary adenoma の像であった。

#### 発生部位と発生個数

発生部位に関して Phillips<sup>39)</sup> は、胆嚢のどの部位にでも発生するが、乳頭腫は体、頸部に多く、腺腫は全例底部にみられたと述べている。

荒木は底部 46.1%，体部 38.1%，頸部 15.8% の順で、底部から体部が大部分であるとしている。今回の集計でも、底部から体部に発生したものが全体の 77% を占めていた。

単発か多発かについて、Shepard は単発性が 28%，多発性 72% で多発性が多いとしているが、荒木の集計では単発例が 69.1% と逆の結果になっている。自験 2 例はともに多発性であったが、本邦例のうち、単にポリープとのみ記載のある症例を除く腺腫例と比較すると、単発性が多くなっている。

#### 胆石の合併と悪性化について

胆嚢良性腫瘍にも胆石を合併するものが認められ、自験例は 2 例とも有石例であったが、本邦では飯塚 14 例中 5 例 (35.7%) 荘司<sup>40)</sup> 14 例中 6 例 43%，荒木 89 例中 39 例 43.8%，小島 12 例中 10 例 83% と報告している。今回の集計では結石合併率は 47% であり、胆嚢癌ほどその合併率は高くない。

胆嚢の良性腫瘍の悪性化については、Kirklin のように悪性変化はまれとする意見もあるが、Tabah<sup>41)</sup> は 4 例中 3 例、佐藤は 14 例中 4 例、荒木は 99 例中 15 例に悪性化を見ており、本症の悪性化はそれほどまれではない。

本邦における悪性化例は自験例を含めて 22 例あり 22% であった。

Sawyer<sup>42)</sup> は文献的考察から、本症は前癌状態として扱うべきものと強調している。

悪性化と胆石の存在との因果関係についてはいまだに議論の多い所であるが、飯塚<sup>25)</sup> は有石率が腺腫例全体、腺腫の悪性化例、胆嚢癌症例の順に高くなることから、腺腫と結石合併例

では、悪性化の危険を考慮した方がよいとしている。

#### 主要症状

本症の主要な症状は腹痛を主訴とするものが多く 61% にあり、発熱、黄疸をみた例は少ない。腫瘤として触知した症例が 5 例 (6%) を数えているが、adenoma に限ってみると触知された例は皆無であった。

萩原<sup>7)</sup> は本症に特有の症状はなく、合併、随伴した疾患による症状であり、多くは胆嚢炎、胆石症の症状であるとしているが、Christensen 等は胆嚢腺腫症例のうち 40% は特に胆嚢に炎症の所見がなく、61% に結石を随伴していないことから、これらの症状の或る部分は、腺腫そのものによる症状であるとしている。

本邦例でも無石例の消化管内出血などが報告されている。

#### 診断および治療

本症は術前に診断することが難しく、その存在が一般的に知られていなかった昭和 39 年までは胆石症、あるいは胆嚢炎として手術される場合が多かったが、40 年以後は術前診断として胆嚢ポリープまたはその疑いとされる症例の増加をみている。

今回、集計し得た 29 例中術前に確定診断されたのは 12 例 (41%) であった。

胆嚢造影における本症診断の要点として、Shepard や鈴木<sup>43)</sup> が考察を加えているが、要約すると以下の項目が挙げられる。

- 1) 胆嚢造影は良好である。
- 2) radiolucent な数 mm から 1 cm 以下の小さな陰影
- 3) 境界は比較的明瞭である。
- 4) 収縮像でよく撮影される。
- 5) 接線方向の撮影で胆嚢壁と連続している。
- 6) 撮影の日時や本位の変化によっても位置が変わらない。

永光<sup>44)</sup> は、胆嚢の造影力が良ければ、4 mm 以上の腫瘤は発見できるとしている。

Kirklin は胆嚢腫瘍における X 線学的検索か

ら、腫瘍による陰影欠損は胆嚢造影施行 20 時間後の単純写真に最も多く認められ、若干の例ではこの時間でのみ所見が得られたとしている。まことに注意すべき興味あることと思われる。

胆嚢エコー像では、乾はエコー強度が腫瘍と胆石では異なり、グレイスケール表示などによって区別できるとして、術前に診断し得た症例を呈示している。Carter<sup>45)</sup>も acoustic shadow のないエコー像で診断した症例を報告しており、われわれの症例においても、エコー像の読影を十分に注意しておけば、術前に確診できたのではないかと反省させられている。

CT は診断的にはかなりの効力を発揮すると予想されるが、その報告はいまだみられず、今後期待がよせられている。

診断における最も重要な点は、本症の存在を

認識し注意深く検索するということであろう。

本症の治療法は malignancy の合併あるいは前癌状態という考慮から、胆摘術を施行すべきであり、また摘出した胆嚢は必ず術中に開いて組織学的検索を行い、拡大切除やリンパ節の廓清といった必要な処置を付加すべきである。

本症の予後は良好なことがしられ、悪性化のみられる症例においても本邦例の多くは限局型である。

## 結 語

胆嚢の良性腫瘍を 2 例経験したが、うち 1 例は悪性変化を伴っていた。自験 2 例は術前の胆嚢エコー像を十分注意しておれば診断し得たのではないかと反省させられる。

自験 2 例を含む本邦報告例につき、文献的考察を加えた。

## 文 献

- 1) 小野慶一, 田中隆夫, 嶋野松明 ほか: 胆嚢良性腫瘍の問題—胆嚢乳嘴腫を中心として—. 外科 35 : 887—891, 1973
- 2) 勝田康夫, 今 哲二, 南部勝司 ほか: 術前に診断し得た胆のうポリープの 1 症例. 日消病会誌 71 : 301—302, 1974
- 3) 阿部要一, 加藤 清, 島田寛治: 胆嚢ポリープの 2 例. 新潟医誌 88 : 339, 1974
- 4) 中垣 充, 田村亮一, 久次武晴 ほか: 胆嚢良性腫瘍の検討, 日消病誌 71 : 941, 1974
- 5) 大西英胤, 安村和彦, 深井志摩夫 ほか: 胆嚢の granular cell myoblastoma. 癌の臨床 21 : 230—234, 1975
- 6) 松浦 豊, 蜂須賀喜多男, 森 直和 ほか: 胆嚢上皮性良性腫瘍の 2 例. 中部外科学会総会第 10 回総会記録: 68, 1974
- 7) 萩原信宏, 河野 保, 伊集 真 ほか: 胆嚢良性腫瘍の 1 例. 外科 37 : 975—978, 1975
- 8) 豊田哲郎, 内本 泉, 菊川政男 ほか: 胆嚢平滑筋腫の 1 症例. 外診 17 : 754—758, 1975
- 9) 菊地 惇, 杉山 譲, 猪野 満 ほか: 稀有なる胆嚢平滑筋腫の 1 例. 臨外 31 : 517—519, 1976
- 10) 乾 久郎, 横井 浩, 巽 寿一 ほか: 超音波同時断層法よりみた脾・肝・胆道系疾患の診断 (胆のう乳嘴腫と胆石の合併症例)・日本超音波医学会 29 回研究発表会講演論文集: 217—218, 1976
- 11) 石 昌事, 坂井洋一, 岡部実裕 ほか: 術前診断が可能であった若年者胆嚢ポリープの 1 例. 日消病誌 73 : 753, 1976
- 12) 神 俊一, 猪苗代盛貞, 飯島 仁 ほか: 胆嚢良性腫瘍の 3 例. 日外誌 78 : 303, 1977
- 13) 岡島邦雄, 木林速雄: 胆嚢良性腫瘍性病変の臨床病理学的検討と癌化の問題. 臨外 32 : 1577—1582, 1977
- 14) 瀬藤晃一, 植松 清, 五百蔵昭夫 ほか: 胆嚢良性腫瘍の経験. 日消外誌 11 : 158, 1978
- 15) 山本定雄: 胆のう Adenoma の一例. 日医放 38 : 197, 1978
- 16) 水野恵文, 足立 泰, 佐野正博 ほか: 悪性化像を認めた胆のう乳頭腫の 1 例. 日臨外医会誌 39 : 409, 1978

- 17) 鮫島恭彦, 内村正幸, 武藤良弘 ほか: 胆嚢粘膜の乳頭状腫瘍(腺癌と腺腫)を伴った膵胆管合流異常症例. 日消病誌 75: 909—915, 1978
- 18) 中川研一, 細馬静昭, 大城久司 ほか: 胆嚢パピロームの1例. 広医 31: 842, 1978
- 19) 中田新一郎, 久保元敏, 皮二神 ほか: 胆嚢ポリープ及び胃癌を併発した *Acanthosis nigricans* の1例. 日医放 39: 99, 1979
- 20) 天野純治, 猪野俊治, 森山昌樹: 胆嚢カルチノイドの一例. 日臨外医会誌 40: 101—106, 1979
- 21) 大下寿隆, 秋山英明, 長谷川晴喜 ほか: 術前に診断し得た胆嚢多発性ポリープの1例. 神奈川医誌 6: 1—5, 1979
- 22) 伊藤通男, 山村武平, 石川羊男 ほか: 肝胆嚢床より発育した巨大脂肪腫の1例. 日外会誌 81: 93, 1980
- 23) 相部 剛, 富士 匡, 清水道彦 ほか: 早期胆のう癌3症例および胆のう腺腫の1症例—本邦報告例による m 癌と pm 癌の対比を含めて—. 日消病誌 77 (臨増): 66, 1980
- 24) 泉山 滋, 三宅直樹, 工藤 守 ほか: 高ガストリン血症. 膵アミロイド変性および糖尿病を伴った, 胆のうカルチノイドの1症例. 糖尿病 23: 179—180, 1980
- 25) 飯塚益生, 市川敏郎, 具 栄作: 胆嚢良性上皮性腫瘍—とくに結石との関係について—. 日消外会誌 13, 313—317, 1980
- 26) 本庄 宏, 菅原恒星, 菅井義久: 胆嚢頸部より発生した Papillary Adenoma の一治験例. 日大医誌 35: 705—708, 1976
- 27) Shepard, V.D., Walters, W. and Dockerty, M.B.: Benign neoplasms of the gall bladder, Arch. Surg.: 45, 1—18, 1942
- 28) 副島廉治: 孤立性胆嚢茸腫. 日外会誌 25: 1293—1295, 1924
- 29) 小島国次, 角原昭文, 原 滋郎: 摘除胆嚢500例の臨床病理学的研究. 癌の臨床 17: 799—805, 1971
- 30) 鍛塚登喜郎, 橋爪陽一, 林 篤彦, 吉田正彦: 胆嚢の良性腫瘍について—統計的観察—. 外治 3: 836—841, 1950
- 31) Mayo, C. H.: Papillomas of the gall-bladder, Ann. Surg. Phila 13: 193—196, 1915
- 32) Kirklin, B. R.: cholecystographic diagnosis of papillomas and other tumors of the gall bladder. Proc. Staff. Meet. Mayo Clinic 5: 336—337, 1930
- 33) Swinton, N. W. and Becker, W. F.: Tumors of the gall bladder, Surg. Clin. North America 28: 669—672, 1948
- 34) Kane, C. F., Brown, C. H. and Hoerr, S. O.: Papilloma of the gall bladder. Amer. J. Surg. 83: 161—164, 1952
- 35) Boergerson, R. J., Delbeccaro, E. J. and Gallagher, P. J.: Polypoid lesions of the gall bladder, Arch. Surg. 85: 234—237, 1962
- 36) Edmondson, H. A.: Tumors of the gall bladder and extrahepatic bile ducts, Atlas of Tumor Pathology, Washington, Armed Forces Institute of Pathology, 1967
- 37) 荒木 攻, 田原栄一: 胆嚢における乳頭状腺腫に発生した早期癌の1自験例—本邦における胆嚢良性腫瘍の統計的観察. 癌の臨床 21: 220—229, 1975
- 38) Christensen, A. H. and Ishak, K. G.: Benign tumor and pseudotumor of the gall bladder. Report of 180 cases.. Arch. Path. 90: 423—432, 1970
- 39) Phillips, J. R.: Papilloma of the Gallbladder. Amer. J. Surg. 21: 38—42, 1933
- 40) 荘司荘太郎: 胆嚢の多発性乳嚢腫の一例. 附, 胆嚢乳嚢腫一般に就て. 外科 6: 1077—1084, 1942
- 41) Tabah E. J. and McNeer G.: Papilloma of the Gall Bladder with in situ Carcinoma, Surg. 34: 57—71, 1953
- 42) Sawyer, K. C.: The Unrecognized Significance of Papillomas, Polyps. and Adenomas of the Gallbladder. Amer. J. Surg. 120: 570—578, 1970

- 43) 鈴木啓充, 近藤利満, 宇野広治 ほか: 胆石を併発せる胆囊 Polyp 癌の 1 症例. 青森県立中央病院医誌 10 : 156—161, 1965
- 44) 永光慎吾: 胆道系早期癌の診断と治療. 日医新報 2412 : 3—7, 1970
- 45) Carter, S. J., Rutledge, J., Hirsch, J. H., Vracko, R. and Chikos, P. M.: Papillary Adenoma of the GallBladder, Ultrasonic Demonstration, J. Clin. Ultrasound 6 : 433—435, 1978